

芥川だより

現像なら、芥川商店街入り口の

発行日 ***2008年5月20日

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

芥川だよりの定期購読をご希望の方にはお送りします。お気軽にお申し付けください

編集発行人 下村嘉明

発行所

着物から服を仕立てます



☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

高槻市芥川町2-14-3

TEL072-681-8870



芥川の写真屋さん



ため池

百年近く前の話である。村の一面に広がる桑畑を田んぼに変えることになった。田んぼは水田ともいわれるように、一年通じて多くの水がいる。貞蔵、忠蔵、嘉蔵の三人が大きなため池を造るために奔走した。◆当時、村には田に引ける水が少なく、水田を拓げることが出来なかった。村の両側に谷川が流れているにもかかわらず水利権がない為、隣の村の取入れ口よりも下流にしか取水口をつくるのが許されなかった。梅雨時などは問題がないが、日照りの続く夏場になれば水路の水は涸れてしまう。遠い昔の取り決めによる水利権は、田

に生きる百姓にとっては何ものにも勝る権利なのであった。◆この水不足をなんとかしなければ二十戸足らずの小さな村は生活の貧しさから逃れられない。村の衆が寄り合いを重ね、たどり着いた結論は、大きなため池を造ることであった。隣村の取水口の下に、谷の両岸を削り谷底を掘り下げ岩盤の上に赤土と粘土で捏ねた土団子を幾人かで持ち上げた木打ちで打ち固める。村中の人々が数年の歳月を費やして幅が百メートル、高さが五十メートルほどの堤防を造り上げた。人の手による作業は困難を極めたに違いない。完成した堤防は多くの水を貯え村の田を増やし生活を豊かにした。◆それから七十年ほど経ち堤防の水漏れが見つかり機械を使って修繕を行なったが、より一層水漏れがひどくなった。修繕どころか堤防の解体を余儀なくされ、先人の偉業をあらためて思った。各地にあるため池も似たような歴史をもつのだろうか。近年の減反政策による荒れた田んぼを見るたびに、米作の盛衰を感じる。

芥川商店街歳時記

今月の予定

おい、カラスよ

リレーエッセイ 「おい、カラスよ」で始まるエッセイを募集します

哀愁

眠っている顔に手を当ててみる。少し熱っぽいかなあ、いや気のせいかな。

感じたのか、目を開けようとする表情、口をモグモグ動かす。

私の手でムリに目を開けさせる。近づいて見る、バアさんの顔忘れたの…。

オリーブの写真もいっしょに、目がしらをくしゃくしゃにして目を閉じてしまう。

私の目にもいっぱいの涙があふれてしまう。

なんで、なんで、こんなことに。

精いっぱい生きて弱みを見せず、介助すら無理じいせず、機関車のように、時にどっこい牛のように生きた人生。

これから、という玄関口に立った時点で、プツツ、と線が切れてしまったのか。

ようやく停車出来る駅にたどり着いたのか。

発車オーライ、ハイ停車。これからどこへゆこうとするのか。

聞えるならば、私はいいたい。やさしい声で、

「ありがとう」と。

のんびり自然体が長生き

自分だけの殻にこもって生きていては、死というものは怖いものと思う。

それまで健康で病気一つしなかった人が急に身体の不調が目立ってくる。男性は女性に比べて抵抗力、耐える力が弱いから、どうしようもなくなってしまうし、目も当てられない。

しかも無趣味で生まじめで、そしてもらった病がウツ状態、タバコに依存したり、最悪のケースが老人性痴呆に。

そうならないためにも、まず心に溜め込まないこと。人に話してみる。共感を示してもらえれば、元気で頑張っ生きていくほうが自分のためにもいいし、もう一つの人生を一人で楽しもうと思うことが大切だと。

それにしても一般的にも、なぜ、女性のほうが寿命が長いのだろうか。

見えぬ苦しみ

表向きは落ち着いているように見えるが、中味はつらい。見えぬ苦しみ、わかってももらえないつらさを胸に秘めたまま、同じ体験した人の助言は救いとなる。

咲きにおう桜の春が去り、若葉の夏

が訪れ四季がめぐってくる。

病も順序を待たずに、思いもかけぬ時にやってくる。

ゆっくり心の底から語り合うことも出来ず。看病することも叶わない現状。そのことズバリ、自分も苦しい、なんとむごい事か、と現実を、心の中に受け入れることも納得することも出来ないまま、時は過ぎてゆく。

そしてなんともいえぬ淋しさがこみあげてくる。顔を見ると何かを語りかけている。

苦しい、帰りたいと、目が私の姿を追ってくる。あんただけじゃないよ、私だつて。

心も身体も疲れが出てくる時

普段から書き留めた言葉に救われています。

本や雑誌で目にしたステキな言葉などメモしておきます。

気持ち沈んだら、そのノートを開いて声を出して読むのです。

「やったあ」と顔がほころんでくるのがわかります。

「悲しいこと」「苦しいこと」「嬉しかったこと」ピツタリの処方箋が見つかるんです。

皆さんは、そんな時、どんなふうにかと身体をリセットしておられますか。教えて下さい。

少しもやる気が出ない日はありませんか。

とにかく、タンスの中を掃除します。

必要品、不用品を分別して、ついでに家中を丁寧に掃除します。

窓ガラスをふき、ぞうきん掛けをするなど。

やれやれと、こざっぱりした部屋は前向きになります。

次、何をしようかな…と気の向くままにやり始めると、いつの間にか落ち込んでいた気持ちがどこかへいつてしまいます。



山岳部の苦悩

梵店主

山岳部の部員は少ない。遭難事故の影響もあり、山に行く者は三人にまで減ってしまった。よっちゃん、M蔵、S太である。M蔵の学年は彼を除いて皆辞めて、彼だけが取り残されたようにいた。

M蔵の心中は複雑であつたが、一度も退部を匂わせる事も、山登りにひるむそぶりを見せることもなかった。

M蔵は、一昨年の遭難事故の現場にいた。冬を思わせる五月の穂高の稜線で、ザイルパートナーを組んでいた先輩が、南岳から大キレットへつづく急な雪壁でスリップして、岩壁群が埋めつくす滝谷の谷底に消えていった。彼はその一部始終を目撃していた。先輩が滑落していく姿を目の当たりにして、山の怖さで震撼したにちがいない。M蔵は、その現場にいなかった部員たちの多くが部を去っていく中で、逃げ遅れたかのように一人残ってしまった。

事故の後、気がつけば、全ての部活動は彼一人が背負う羽目になっていた。M蔵が辞めれば部が存続できない状態だった。

実を言えば彼も退部していても不思議ではないのだが、何が彼を踏み止まらせたのか。

それは山、山岳部を愛してやまない純な気持ち以外の何ものでもなかった。彼はきわめてまじめで純粋な性格である。如何なる危険なルートでもひるまない性格の持ち主であり、強い意志をもっている。

そんな何とも言いがたい、難しい部内の状況下に、よっちゃんは入部してきたのである。M蔵はよっちゃんの一つ上の上級生になるのだが、従来の上級生下級生の関係とは違った同級生以上の一体感を感じ始める。M蔵は孤独なこともあつたが、よっちゃんの抜群な体力を見て、よっちゃんとならどんな山でも、どんなルートでも登れると確信するのであつた。

しかし、よっちゃんは体力だけは強かつたが技術が伴わないから、新入生を迎えて苦労するのである。

余程のバカでない限り山岳部なんかに入る奴はいない。しかし、新人を入れないと部が潰れるので何とか新人を入れなければいけない。

三月の大雪山合宿を終えて京都に帰ると、もう四月、新入生を勧誘する季節である。下手な手書きのポスターを校内に貼って、新人が部室のドアをたたくのを待つ。待つが誰も来ない。そこで、デモンストラーションをする。

一番目立つ校舎の上からザイルを垂らして、学生が見てる前で懸垂下降を行う

のである。少しでも関心のある学生を探した。案内看板を作り、机を出して勧誘した。飯を食わして機嫌をとり、何とか十人ほど集めた。

新人が入ると部室に集めて、簡単な説明をするが、詳しくはしない。辞められたいからだ。何とか続かせたいから、初めは少し甘やかすのである。体育会山岳部だから毎日トレーニングはする。

毎日練習を繰り返すうちに、新人の何人かは「ついていけないから辞めたい」と言い出す。説得するが、大半は部を去っていく。こんな事が毎年続き、体育会山岳部は万年部員不足だった。



山岳部に入る学生は変わった人間が多い、ひとり息子とか長男、何も知らないぼんぼんとかである。目先の利く賢い奴はまず入らない。仮に入ってもすぐ辞める。そういう意味では、大いなるバカしか続かない。そんな奴はなかなかいない。

どうにか残った新入部員を連れて、岩登りの訓練に大原の金比羅山に行く。金比羅神社から上に登ると、大きな岩塊がいくつかあり、その岩場を利用してザイルの使い方や岩登りの技術を指導する。このトレーニングには歩き方、テント生活、ザイルの使い方等登山の基本訓練が含まれている。これらの中で岩登りは特別である。ほとんどの者が初めてであるし、危険であるために難しい訓練になる。

つねに誰かが辞めたいと言い出して、よっちゃんやM蔵を困らせた。その悩みを更に深くしているのは、山岳部は伝統があり、多くの先輩がいて簡単につぶせない事であつた。当時の名簿では三百名ほどが名を連ねていた。コーチ、監督をはじめ多くの先輩達が取り巻いていたのである。

先輩達がある大学の山岳会を論じて、「あそこは年寄りばかり多くて五十歳ぐらいでも若手あつかいである」と老害を笑っていた。我が部も似たり寄つたりの状況下になっていくのであるが……。

私は、祖父が他界した四カ月後に生まれた。祖父は、病床につきながら母に向かつて「男の子が出来た、男の子が出来た、早く顔を見せてくれ」と何度も何度も繰返していたそうである。今と違って男女の識別は出来ないのに、祖父は、その願望が強かったのか或いは死を直前にして勘が鋭くなっていたのか、孫の二人目が男であると確信していた。祖父は、「炭焼き」指導員をしていたというので、我家に毎月現金収入をもたらす唯一の人だった。息子である私の父は、家において百姓や山仕事で戦後の六、七年を過ごし、祖父の没後に村役場に職を得、家計を繋いだ。祖父が他界したのが五十半ば、父が定年退職したのが五十五歳、今私はその年齢をとうとう超えた。

個人より「家」を主体にする考えが根強い時代を生きてきた祖父にとつては、男子が絶対的に必要であった。守らなければならぬものが特別ある訳でないのに、「家」を継ぐべき男を必要とする。営々と続いて来たこの考えは、やすやすと消え去ることではない様にも思われる。農家では特にその思いは強かった。子供が産まれると名を付けなければならぬ。名前が無くていいの

は漱石さん所の猫だけである(漱石は、「我輩は猫である」を一週間で書き上げたとか)。

私は、我が子の名前を決めるのに何の苦労もなかった。結婚もしないうちから、もし子を持つようなことがあれば、この名にしよう決めていた。それは、私に学問することの厳しさと喜びを教えて下さった先生の名を拝借し、男ならこれ、女ならこれと当然のこととして決めていたのである。先生の名前二文字を一字ずつ頂こうと考えていたところ、上手い具合に一男一女となり、私の思いは無駄にはならなかった。

私の親もあなたの親も「名」を付けてくれた。当たり前であるが、他人と区別するためだけに付けたのではない。その名には「親の思いと願い」が凝縮されているはずである。

父は私に「理(オサム)」と名付けた。何故とその訳を聞くと、「お前は、長男だからこの家を継ぎ、里の王としてここを治めなければならない」との説明である。そう言えば、祖母もまた長男とか総領とかそのような言葉を私によく投げかけていた。たまたま順番が違っただけであるのに長男次男、長女次女の担うものが変わってしまう。ところが案外そうした環境に置かれると自然と抵抗なく受入れている。環境とは

本当に恐いものである。

さてあなたの名には、どの様な「願いや思い」が託されているのでしょうか。

私は、親の思いよりも名の「文字」に左右されて来たと思う。感情を抑えること、理路整然と物事を把握すること、知らず知らずの内にそうあらねばならぬと思ひ込むようになっていた(本性は正反対)。あなたはどうでしょう、頂いた文字を気に掛けることは無かったですか。旧知の人を思い起すとき、なぜか名前(文字)とその人の顔が切り離されることなく同時に浮かんでくる。経験的にそう記憶に取込んでいるだけのことであらうが、その人には、その名前以外考えられない。一つ名前と長く付き合っていると、名が同時に人格に変容しているようにすら思われる。何の根拠もないが、「字」にはそれ自体の生命が宿っているのではなからうか。このように考えると、我が子にやすやすと名前を付けたが、名を付すことに安易であつてはならぬと今思う。

名前は、特段の事情がない限り初めから終わりまで付き合うパートナー。五年以上一緒に生きてきた。名は、己の中の善なることも悪なることも全部知っている。自分以上に自分なのかも知れない。戒名を頂くまでこの名と共に歩んで行かなければならぬ。親の願いに即することは殆ど出来ていないが、可能な限

りその名(字)の通り、その名(字)に恥じぬ姿で進みたいものではある。総ての人がその名に相応しく人生を歩むことが出来るなら、諍いや争いもなく、騙すことも裏切れることもなく、殺めることも裁かれることもなく、自己のみを優先するのではなく、相互に補完し合う社会が作れるはずである。

やがてこの名との付き合いもいつかは終わる。だが、そんなこと思っていたら眠るに眠れなくなるから、自分には無縁のこととしてやり過ぎしている。

我が命は永遠であると上手く錯覚するように人は出来ているらしい。あの一休さん(二休宗純)でさえ、辞世の句に「きのうまで ひとのことよと 思いしが 今日わが身か こいつたまらぬ」と詠われたそうだから。

己が名の持つ意味や名付け人の思いに少し心傾ければ、また何か違った生き方が出来るかも知れない。その文字と人格が一体となった「名前」は、地上に一つしかなく極めて大切なものと思う。普段宛名書きや自身の署名を無造作に行っているが、この先は少し気持を入れ替えよう。名は単なる記号ではなく、その人自身なのだから。

我が息子を「知(サトシ)」娘を「文(アヤ)」と名付け、二人揃うと「知文(トモフミ)」、我が師の名前となる。今は二人の子供が、私の先生でもある。

疎開の現実

昭和二十(一九四五)年春、まだ肌寒い頃です。長野の疎開地は、山また山が幾重にも重なり合う、美しい緑にかこまれた静かなところでした。清涼な空気の中を小川が道に沿って流れています。どこのお家も道から少し高いところにあつて、坂を登って家に入ります。

私は山登りが好きで、東京では愛宕山、近郊では榛名山、高尾山へハイキング出かけたものですが、山の中で暮らすということは山登りとはまったく違います。どこを向いても緑の木々が繁っている、こんな山あいで暮らすのは初めてです。座ってじっとしていると、虫が身体に這い上がってくるのです。山の中で暮らすということは大変だなあと思いました。

まずは、私たち家族が暮らせるような住居を探さねばいけませんね、と母に相談しました。先に来ていた父も同じことを考えていて、すでに見当をつけていたのです。そこは小川の向こう側にある養蚕をしているお家でした。さつそく父に連れられてお願いにあがったところ、快く引き受けてくださいました。囲炉裏の部屋と寝室になる部屋と、二間つづきで開放してくださいさつ

たのです。

トイレがついていないので、仮設トイレを作ってくださいました。地面に穴を掘って中に肥タゴを入れて、そのまわりを簡単な柵で囲ってあるというだけの排泄所です。そんな簡易なトイレでも、まあ誰にも見られないでゆつくり用をたすことができます。それだけでも有り難いと思えました。身体の不自由な父に支障のないようにと、支えも作ってもらいました。

肥が一杯になったら山の畑に捨てに行かなければなりません。朝起きて、肥タゴを天秤棒で前後にぶらさげて、バランスをとりながら坂を登り、決められたところに杓で流します。私が千鳥足で肥を運ぶとき、妹は「がんばって」とばかりに手をパチパチとたたきながら、楽しそうにはやし立てるのです。そんな肥タゴ運びもしばらくしてすっかり慣れました。

この肥運びは、父と三人の時は週に一度でよかったです。五月月ほどして戦争が終わると人数が増えて、毎日の日課となりました。

妹といっしょに荷物を家に運び、生活日用品は最小限に整えた質素な生活が始まります。囲炉裏で煮炊きなどしたことがなかったので、家の小母さんに親切に教えてもらいました。ご飯の炊き方からお茶の沸かし方……など

など、はじめはなかなかうまくゆかず、食事の用意に手間取り、それは大変でした。

水は井戸水ももらい、洗い物は小川ですませます。近所の方々も親切にしてください、煮物やあえ物をつくと、鉢に入れて届けてくださいます。気楽にお付き合いくださって、米や自家製の醤油などをいただきました。私は洋服の仕立注文が貰えるようになり、みなさんのお役に立てることがたいへん嬉しく思いました。

気候が暖かくなると、山を散歩する楽しみを覚え、山の中で山菜やキノコを採ったりしました。畑仕事を覚えて、野菜もつくりました。みなさんに喜んでもらえるように、少しの時間も惜しんで、大家さんの養蚕や畑仕事などのお手伝いをして、一生懸命働いたのです。ある時、息子の嫁になって欲しいと申し込まれた時には恐縮しました。

六月は田植えのシーズンです。そのころは田舎生活にもすっかり慣れ、「田植えのお手伝いに来て下さいね」と声をかけていた。田植えのお手伝いにもいききました。草刈のお手伝いもしました。そのときの田植えのお手伝いは私にとって貴重な体験で、大阪に帰ってからの田んぼ仕事にたいへん役に立ったのです。

日本の戦況は敗戦の色濃く、四月には沖繩の激戦も伝えられました。軍民玉砕の総力戦で、沖繩では多くの人々が命を落とす凄惨な戦いを強いられたいのです。

三月一〇日に東京が空襲されたときは私もそのただ中におりましたが、この東京大空襲を皮切りに大阪や名古屋などの大都市が爆撃され、米軍の容赦のない焼夷弾爆撃は地方都市にも広がっていききました。

そして八月六日、広島に原爆が投下されます。爆心地にいた人々は「ピカドン」の次の瞬間に焼き尽くされ、生き残った人たちは火の海の中でもがき苦しみました。川は死骸の山だったそうです。八月九日には長崎にも原爆が投下されました。広島も長崎も一瞬にして壊滅し、三六万以上の人々が亡くなったのです。原爆の凄まじい威力に日本中が驚愕し、動揺しました。

原爆投下にあわせるように、ソ連は八月八日に日本にたいして宣戦布告し、国境を越えて中国北部から旧満州、朝鮮に侵攻したのです。この侵攻の中で、残留日本人が暴行され、略奪され、女性は強姦され、彼の地で一七万もの人が命を落としました。

八月十五日。ラジオは朝からくり返し、正午に陛下の重大発表があると報じていました。その放送を聞いて、み

人権てなんだろう

科野山猿

四月二十六日、長野市の聖火リレーはおおかたの予想どおり喧噪の中で行われました。聖火ランナーのまわりを警備が二重、三重に取り囲み、沿道には赤い五星紅旗やチベットの雪山獅子の旗をもった人たちがあふれ、怒号の飛びかう光景は異様でした。聖火をめぐって世界各地で同じような騒動がくり返されました。

この騒動の直接の原因は、三月にチベット各地で起こった暴動にたいする中国の武力弾圧にあります。中国の力による弾圧は人権の蹂躪だというわけです。それにたいして中国は、一般市民にまで危害がおよぶ暴動を押さえるために必要な手段をとっただけだと主張します。暴動は祖国分裂を画策するダライ・ラマ一派が煽動したものであるという。チベットでは観音菩薩の化身として広く尊崇されているダライ・ラマ十四世を「僧衣をまとった狼」とか「仏教界のカス」と口を極めてのりしました。ダライ・ラマ憎しのあまりのことでしょうが、あの非難の仕方は逆に自らの品位をおとしめ、宗教を見下し、中国には信仰の自由がないということを表明しているようなものだと思います。そしてチベット問題は内政の問題であると、他国の非難を封じ

ようとしませう。

人権侵害という非難は西側の価値観の押しつけだと中国人は反論しますが、そもそも「人権 (human rights)」とは何なのでしょう。広辞苑によると「人間が人間として生まれながらに持っている権利」です。つまり「基本的人権」。この記述ではどうもよくわかりませぬ。要するに、だれもが一個人間としてかけがいのない価値をもっているんだよ、だれもが人間として尊重されなければならないんだよ、という人間として生存する権利のことでしょうか。ところが、この「だれもが」というのは時代や国によって異なるのです。

人権というのは、中国人が西側の価値観だと指摘するように、近代西欧で生まれました。出自はイギリスですが、当初の人権はイギリスの本人人だけに過ぎられるものでした。植民地のインドやアフリカの人々まではまったく考慮に入れていません。一七八九年のフランス革命における人権宣言にしても、女性の権利は除外されています。アメリカにおいても、先住民を虐殺したり、略奪をくり返していますし、アフリカの黒人を奴隷として酷使しました。四十年あまり前まで、アメリカ先住民や黒人には人権がなかったのです。

一九六四年の東京オリンピックで、メダルを獲得したアメリカの黒人陸上選手が、表彰台で黒人差別にたいする無言の抗議をしました。その姿は、小

学生だった私にはいまも鮮明に覚えています。国旗が掲揚され国歌が流れているとき、彼は黒い革手袋をはめたコブシを天に突きあげ、国歌国旗に背を

向けるようにうつぶむいていました。東京オリンピック開催の直前に黒人は市民権を獲得しましたが、根強い蔑視はなくなつたわけではありません。その後さらに黒人解放運動は激しくなり、翌六五年には暴力的な手法で運動を押し進めるマルコムXが、六八年には非暴力抵抗を唱えるキング牧師が暗殺されます。人権侵害の根には蔑視、差別意識があるのです。

人権蹂躪の最たるものは戦争でしょう。アメリカが自衛のためといつてはじめたアフガン戦争、いまや大量破壊兵器の保持という開戦の根拠が否定された大義なきイラク戦争、現在もおおつづくこの二つの戦闘でどれほどの無辜の民が命を落としていることか。戦争は一個の人間として普通に生存する権利を、兵器によっていとも簡単に破壊してしまうのです。そういう戦争をはじめたブッシュ政権、それに同調して積極的に参加した国々は、人権感覚が恐ろしいほど欠如しているのでは

ないでしょうか。武器によって平和がもたらされるどころか、ますます泥沼化しています。

昨年九月にミャンマーが仏教僧のデモを武力鎮圧し、多くの犠牲者を出しましたが、これははなはだしい人権蹂躪で、言語道断です。

中国側の反論の中に、チベットは一九四九年まで農奴制だったんだ、その農奴制こそ人権侵害であり、その農奴を解放したんだ、という主張があります。たしかにチベットは二十世紀前半まではダライ・ラマを頂点とするヒエラルキー社会、整序された階層社会でした。その時代のチベットをつぶさに見て、社会状況や風俗などをくわしく報告しているのは河口慧海です。慧海は、一九〇〇年(明治三十四)三月から一年二カ月あまりラサのセラ寺に滞在し、ダライ・ラマ十三世にも謁見しています。慧海が記した、平民のおかれた実状の報告を見てみましょう。

ダライ・ラマ法王政府は俗人と僧侶から成り立っていて、組織の要職に就く人の家筋は華族と決まっています。華族というのは祖先が国に功労のあった家で、地方に領分をもらっている。その領地に属しているのが貧しい平民です。平民の生殺与奪の権利は華族にぎっています。平民は人頭税を華族に納めなければなりませんし、そのく

こうえ、土地を貸してもらってはいまから、その地代も納めなければならぬ。政府にも幾分か税を納めなければならぬから、二重の税に苦しむ。納めなければ、なぐられたうえに財産を没収されてしまうのです。重税の苦しさに絶えられず坊主になるものもたくさんいました。

このような制度は残酷だと慧海はいます。「貧民はますます貧に陥って苦しまなねばならぬ。その貧民の苦しき状態は僧侶の貧学生よりなお苦しいです」。貧学生は月一度の学禄をもらえ、お布施もある。自分一人のことだから何とかやっつけていけますが、俗人には女房があります。そのうえ子どもができれば、たいへんです。子どもを育てるにも多少のお金がかかります。そのお金は華族から借りる以外ない。借りたところで返せる見込みなどない。そんなお金を華族はなぜ貸すかというのと、その子が十歳くらいになったら家の奴隷にするためなんです。「貧乏人の子どもは生まれながらの奴隷で誠に可哀なものです」。貧民に人権なんてありませんでした。

一九四九年に解放されるまでつづいていたんだと中国は強調します。ではなぜ、農奴であった大多数のチベット族に支持されていいはずの共産党政府にたいして反撥が起こるのでしょうか。一九五八年に東チベットのカムで暴動が起こり、またたく間に中央チベットに広がり、翌春にはダライ・ラマ十四世がインドに亡命します。この叛乱は、五七年に毛沢東の指示によってチベットの改革が強引に進められたことに端を発します。軍を増強して力によって共産化を押しすすめようとする共産党にたいする抵抗運動です。中国のいう改革がチベット人にとって、暴力的な押しつけであり耐えがたい理不尽なことだったのでないでしょうか。この叛乱は武力によって鎮圧され、多くのチベット人が犠牲になりました。その後、文化大革命が起こり、中国全土で寺院や仏像が徹底的に破壊され、大量殺戮が行われました。チベットも例外ではありません。その傷跡を私も見ましたが、無残なものです。壁に描かれた仏画の顔の部分がえぐられ、仏像の頭はもぎられて近くに転がっていました。のちに共産党はこの文化大革命を「内乱」「党の最大の過ち」と自己批判しますが、人権蹂躪どころか、虐殺です。今年三月にチベットで起こった暴動

は、中国がいうようにダライ・ラマ一派の過激グループが煽動したのかもしれませんが、武力鎮圧で死者が続出しているわけですから、チベット人の人権は著しく侵害されたと思います。中国もダライ・ラマのみのせいにして、力で押さえつけていてはふたたび暴発することはまちがいないでしょう。

私は中国に六回ほど行きましたが、数人の中国人に宗教について尋ねたことがあります。返ってくる答えは「宗教は迷信に過ぎない」という素っ気ない返事がほとんどです。四川省のチベット族自治州で役人をしていた人はチベット族ですが、「母は熱心な仏教徒ですが、私は仏教を信仰していませんし、宗教はもっていません、共産党員ですから」といっていました。

チベットでは、お寺の境内で本尊に向かって五体投地礼をくり返して祈りを捧げたり、道行く人がマニ車をまわしながら「オムマニ・ペメム」(蓮華の上の宝珠に幸あれ)という聖句を口ずさんでいる人を見かけます。そんなチベット人にたいして鼻で笑うような態度をとったり、見下すような言動をする中国人がいました。宗教は迷信と考える人にとって、宗教を信仰する人はバカなことをやっているというふうに見えるのかもしれませんが、そういう差別的な眼差しからは人権感覚は生まれ

くるとは思えません。

人権感覚は、ある憲法学者によると、弱者への配慮だといいます。テロや爆撃という暴力におびえ恐怖におののくイラクの民衆、構造的貧困にあえぐアフリカの人々、飢えに苦しむ子どもたち、あるいは理不尽に役割を押しつけられる女性たち、そういう弱い立場に立たされた人たちにたいする配慮ですね。

日本国憲法は、人権の本質である「個人の尊厳」を保障しています。それを正当な理由なしに奪ってはならない。国は国民一人一人の人権を守るために存在しているのです。ところが、この国の官僚や政治家は、老人を社会の重荷として一くくりに見捨てるような制度を臆面もなくつくってしまふ。批判が湧きあがると、与党の政治家は説明不足だ、誤解だといいます。これは説明云々の話ではなくして、官僚・政治家の人権感覚のはなはだしい欠陥が問題なのです。

人権侵害は世界のいたるところで起こっていますが、一方で、人権というものは国を超え、人種、性別、文化、宗教の違いを超えて保障されなければならないインターナショナルな権利であるという認識が、国際的に広がりつつあるのもたしかなようです。

ですが僕は、人間の尊厳だけが声高に強調される世界観には、どうしても居心地の悪さを感じてしまうのです。

逍遙は、文芸協会における風紀が乱れることに神経質なほど厳しかった。

恋愛事件で退会させられた研究生は二〇名にもおよんでいる。電車の停留所から研究所まで相合い傘で歩いたというだけで除名されたものがあつたという。抱月と須磨子の恋も、演出者と研究生の間とはいえ、許されることではなかった。

明治四十五年(一九一三)の「故郷」公演後、抱月が須磨子に心を奪われていることに逍遙は気づきはじめる。協会内の風紀違反には厳しくあたつてきた逍遙としては、二人の恋愛を見すべしことはできない。未然に別れさせようと抱月を諭して、三カ月ほど京都に逗留させたり、須磨子と呼んで、抱月をあきらめるよう説得もした。逍遙にとつて抱月は愛弟子であり、須磨子は文芸協会の看板スターなのだ。表沙汰になる前に仲をさこうとしたが、二人の恋愛はのっぴきならないところまで進んでいた。

大正二年(一九一三)五月三十一日、須磨子は協会から諭旨退会を命ぜられ、抱月は辞任する。七月に入つてすぐ、抱月は文芸協会の二期、三期生を集めて、新しい劇団「芸術座」を旗揚

げするのである。時を同じくして須磨子と同棲を始める。逍遙一代の事業であつた文芸協会は、六月の「ジュリアス・シーザー」の公演を最後に解散した。

芸術座は当初から波乱含みだつた。抱月は不慣れた劇団運営をしなければならぬうえ、たえず須磨子と男優たちの間にただよう険悪な空気に悩まされた。それは、須磨子の、女王に隷属するのは当たり前だという傲慢な態度、傍若無人な振るまいに起因するところが多かつた。須磨子はときに抱月にたいしても居丈高な態度を示し、激しい喧嘩もしている。

芸術座の旗揚げ公演は九月、有楽座で行われた。演目はメーテルリンクの「内」と「モンナ・ヴァンナ」、観客の入りはよく、興行としては成功した。

十二月、帝劇女優劇の中幕に芸術座が「サロメ」を臨時公演した。須磨子はわがままで勝ち気なサロメを巧みに演じ、ノラやマグダ以上に高く評価されるのである。須磨子のサロメは、カチューシャに次ぐ当たり役となつた。

翌三年一月に行われた第二回公演の「海の夫人」(イプセン)と「熊」(チェーホフ)は興行的に失敗した。この公演直後に事件が起こる。毎月三十円の報酬を得ていた須磨子は抱月に百円を要求した。それを耳にした男優たちは、須磨子にたいする積もり積もつた憤懣を爆発させた。ところが、抱月は彼らの心中を無

視し、須磨子の意に沿うようにするといふのである。

須磨子は金よりほかに楽しみがない女といわれた。一人をのぞいてすべての俳優が芸術座を脱退した。

第三回公演

「復活」(トルストイ)は三月に予定されている。中止するわけにはいかない。急遽ほかの劇団から男優を招いて上演することになった。この「復活」が大ヒットするのである。

この芝居のなかで須磨子がうたう「カチューシャの唄」が人々の心をうつつた。ラジオが普及していない時代に全国で流行し、「カチューシャ可愛や別れのつらさ……」と口ずさむ声が津々浦々で聞かれたという。歌ばかりでなく、カチューシャ櫛やカチューシャ・リボンなどがはやり、若い女性が須磨子の髪型をまねた。

「復活」は、内地ばかりだけでなく朝鮮、台湾、満州でも上演され、公演回数は四年間で四四〇を超えた。芸術座の代表する演目となつた。



カチューシャ(右・須磨子)とネフリユードフが窓辺でうたう劇中歌が、民衆の心にひびいた。(須磨子芸術倶楽部)

大正四年には信州から関西、九州へ長期の地方巡業をした。地方公演で収益を上げるいっぽうで、抱月は芸術劇にこだわり、念願であつた演劇の研究所、芸術倶楽部を暮れに完成させた。

ここは抱月と須磨子の愛の巣も兼ねていた。舞台と三百席ほどの小劇場があり、研究劇やけいこをするのに快適な場であつた。芸術倶楽部の負債を償却するためにもつらい地方巡業をつづけなければならなかつた。

いまや芸術座の女王に君臨する須磨子は、抱月の手に負えないほど横暴になつていた。いろいろなエピソードが残っている。

抱月の娘が芸術倶楽部に生活費を受け取りに来たとき、門前払いした。前の家では娘に水をかけようとしたと、

くいう。また娘たちに「私をお母さん

と思わなければいけない」ともいった。大阪公演で、腹痛を訴えた女優のために幕を早く下ろしたとき、口汚くののしつたこともあった。

抱月との間を彷彿とさせる話も伝えられている。鹿兒島公演のとき、抱月が芸者の羽織の裏に「わが胸のもゆる思ひにくらぶれば煙は薄し桜島山」と揮毫したのを見て、須磨子は抱月の膳をけとばし、鞆のなから着物を投げ出して、むしゃぶりついた。抱月は「度しがたい女だ。芸術座は解散する」と怒って、経営部に電話をかけたという。翌朝、駅の待合室で座員が不安そうに待っていると、須磨子が抱月に寄り添って、「先生」とひそひそ笑いながらささやくと、抱月は「天真爛漫だ。そこがいいのだ」といったというのだ。

抱月がけいこ場で須磨子にセリフを二、三度いい直させると、須磨子は突然立ち上がり、抱月をにらみつけて出ていってしまった。抱月はおどおどして、人目もかまわず彼女のあとを追ったという。

芝居より須磨子が大事だと抱月は断言しているが、須磨子の燃えあがる野生的熱情は、抱月に、激しい争い、つかみどころのない戸惑い、熱い抱擁をもたらした。

サラリーマン・エッセイ⑥

団塊世代に告ぐ

明石 幸次郎

サラリーマンが退職後の“人生の後半の生き方”についての問題は、定年を迎える大量の団塊の世代、約七〇〇万人近くの共通の問題であります。

本屋に行けば、この団塊の読者を対象にした、定年後を如何に過ごすかに関連した本が数多くありますので、この年代の方は何冊か問題解決の参考に読まれた経験があたりだと思えます。私も先輩から回ってきた本を含めたら、手元に七、八冊位あり、強弱は別にして全て一応は読みました。

これらの本を書いた人に共通して言えることは、まあそこそこの人生の成功者で、生きる事をそれぞれの仕事を通じて努力を重ねたその道の達人であることです。確かに、これらの本は読んで参考になります。私のような凡人がその生き方、やり方、姿勢を今更真似をしたとして、果たして自分のものになり後半の人生がそれにより充実したものになるのかと言った疑問が残りました。

例えて言えば、サラリーマンは共産主義の東ドイツ人が、統合された自由主義の西ドイツ人になるようなものでありますから、自由な身になった途端、

何をしてきたら良いか分らなくなつて、悩んでしまうのは当然です。

しかしながら、定年後の後半の人生こそ、今までの共産主義体制の如く組織の制約に縛られていた不自由な人生を、他人が自分の生き方を決めてくれない代わりに、全て自分で決められる自由があります。それは、自分なりに考え、行動して、失敗しながら、そこで自分らしさを見つけ、しかも他人の評価は気にしないで生きると言うことだと考えます。

日本人は往々にして誰かが仕掛けた流行に流れやすく、特に団塊の世代は割合にその傾向が強く、自分なりの考え、生き方、真の個性を磨いて来なかった世代とも言えます。

会社、役所においては、団塊世代は戦中派世代が戦後苦労して築いたルールの上を同期と一生懸命競争しながら、走っていただけで、戦中派を押しつけて新たなルールを敷くという行動はバブル崩壊を経て遂に発揮する機会を失い、定年を迎えることとなった世代です。定年後の生き方も戦中派の成功者が書いたものを参考にして、再びそのルールを走らされる様な主体性のない生き方をしてはならないと思えます。

これまでの経済優先、開発優先、企業利益優先、都市優先、学歴優先、出

世優先は、戦前、戦中派が作った価値観、仕組みは日本のあらゆる分野で歪みを生じさせています。団塊の世代はこの価値観、仕組みを学生運動でも、社会の現役時代にでも変えられませんでした。

この出来なかつた反省を踏まえ、新しく地球環境優先、文化優先、無償の行為優先、地方優先するような社会の仕組みに変えるように、自由な市民として行動を起こすことが、団塊七〇〇万人の退職後に課された仕事であります。

マスが大きいだけに、それぞれがそれぞれの立場で少しでも行動を起こせば、この歪な日本の社会もまともになるかも知れません。

人生後半の生き方で悩んで、元同僚と昼間から酒を飲んで愚痴を言っている暇はありませんよ、団塊の皆さん！

汚染される環境と人体⑦ 脳アレルギーの証明(二)「ワクチン禍」

山彦海彦

脳は、知覚をはじめ人間の理性・思考・情動など、人間性の本質を担っています。そこがアレルギーに冒されるとどうなってしまうか？

戦後ワクチン注射が始まって以来、数々の重篤な感染症から我々は何億人も救われてきました。しかしワクチンは、副反応としてごく一部の患者に重篤な被害を及ぼしてきました。その一例が「帝銀事件」です。

脳アレルギーの片鱗を示すある有力な過去の研究が、ご本人が気付かぬまま本として出版されています。それは元精神科医であり、脳神経学者の故白木博次元東大医学部教授が著した『冒される日本人の脳』（原書房）です。脳アレルギーについて大変興味深く記しています。白木氏は東大の医学部長を務めるかたわら、公害訴訟の法廷でワクチン禍・スモン訴訟・水俣病の神経病理について証言し、裁判を患者側に有利に導きました。その中の「ワクチン禍」が、視点を変えれば既に脳アレルギーを立証しているとしてもおかしくありません。

一九四八年、東京で「帝銀事件」が起きました。犯人である平澤死刑囚は

保健所職員を装い、疫病発生 of 虚言

を弄して銀行職員を騙し、その場に居合わせた職員全員に青酸カリを飲ませ、金庫から現金を奪った事件です。

一〇人以上が犠牲になりました。驚いたことに白木氏は、著書の中で平澤死刑囚を平澤氏と呼び、ワクチンの犠牲者として扱っています。

三〇代半ばまで健康だった平澤は、あるとき妻が犬に噛まれたことから八回に及ぶ狂犬病のワクチン接種を受けた後、三週間してから足が疲れ、痺れを訴え、三晩続けて妻を識別できない言動があったといえます。記憶が無く、運動性麻痺、一時的視力喪失、嗜眠、と続き、性格の変化が起りました。それはアルコール精神疾患の特徴であるコルサコフ症候群と診断されました。その後その性格的な変化は酷くなり、ついに五〇代後半に帝銀事件を起こしたのです。

注目点は、平澤が獄中で死んだとき解剖され、脳の所見を白木氏が述べている部分です。「そこには多少たりとも遅延アレルギー型である脱髄疾患の名残が場所によっては見受けられなくもない」と所見を述べられています。

同様に狂犬病のワクチンを受け、同じ症状を起こした患者を白木氏は診察しており、二人は初老期にてんかん発作も起こしています。冤罪とする支持

もありませんが、要は白木氏は帝銀事件を起こしたのは平澤氏であれ、彼の脳を異常にさせた根本は三〇歳半ばに受けた狂犬病予防のワクチンによるものと捉えているのです。

ワクチンは病原体を生卵などに植え付けて作られます。接種する場合、当然卵にアレルギーがある場合などは気をつけなくてははいけません。ワクチンにはその他に補助剤として様々な成分が含まれています。その中で一番問題となるのが防腐剤として添加される50%水銀化合物「チメロサル」です。

アメリカでは一部の自閉症児の親たちが、予防接種を受けたあと子供に異常が現れたことに気付き、水銀に絞った裁判が現在進行中です。日本でも親たちがインターネットで集まり、メーリングリストを開いていました。僕も参加していました。残念なことには水銀の直接的な影響として捉えすぎて水銀自体にアレルギー反応が起きたり、また水銀が免疫を乱してアレルギーを憎悪させる作用を見落としていました。

僕と同じ見地からアメリカで出版された本が邦訳されています。医事評論家ラッセル・マーティン氏が自閉症の甥のために書いた『自閉症児イアンの物語』（草思社）です。

僕は現在そのメーリングリストから残った親たちと、自閉症をアレルギー

として捉えて活動しています。

寛解(原因を除去すると回復するが、曝されると悪化する状態)はまだ遠いですが、明らかに原因となるものを除去すると改善し、誤って与えると症状を悪くする自閉症児がいます。

食物や普段使用する化学物質までは何とか対応できますが、呼吸で体内に吸入される化学物質や埃・黴・花粉などが除去しきれずに「寛解」にまで到達できません。前に紹介した化学物質過敏症発見者、セロン・G・ランドルフの包括的技法が可能なら、あの子どもを救えます。

知られていませんが、アメリカでは既に自閉症を食物アレルギー・化学物質過敏症として捉えて、ランドルフの方法で有効な治療を行った研究が発表されました。しかし、日本でもアメリカ本国でも一般には未だ知られていません。

自閉症は化学物質過敏症がさらに悪化した多種類化学物質過敏症・多種類食物アレルギーの治療がメインとなるのです。日本では化学物質過敏症のための環境施設が北海道旭川と福島県会津、静岡県伊豆、そして山口県に造られています。その様な環境の良い施設で治療が行われるなら多くの自閉症児が回復するでしょう。それが僕の切ない夢なのです。

堂満岳登頂物語(二)

科野山猿

堂満岳は標高一〇五七メートル、比良山脈のほぼ中央に位置し、東面にせり出した岩は谷を埋めつくすほどの荒々しさを誇る。まさに比良Ⅱピラ、その名が意味するような急峻な山溪、比良山脈を代表する山なのである。そんな雄々しい山容もさることながら、堂満岳には興味深い伝説が染み込まれているのだ。

その昔、最澄が叡山を開く以前、隠遁の志、深い鎮満上人という修験道の行者がひとり比良の山に入った。それは、お釈迦様が説いた八正道、すなわち八種の修行徳目を実践するためであった。八正道とは苦を滅するための修行であるが、その本質は、けつきよく「死ぬまで、絶対セックスしたらあかん」ということにつく。凡夫にはとても守れない、無理を承知の教えである。鎮満上人はそのお釈迦様の教えを厳格に守り、比良山中にて苦行を積んだ。

岩の台の上で、あるいは大木の虚の中で何日も瞑想し、あるときは比良から日本海にいたる重畳たる山脈の中を、泳ぐように遊行した。森の中を疾走する上人を見かけた里人は天狗と見紛うて、畏れたという。その上人が営んだ草堂が堂満岳にあったと伝えられる。いまは朽ちて痕跡すらない。

秋深まりしある日、冬枯れの森の中で生き物たちはすでに冬支度を整え、雪の

到来を待っていた。鎮満上人は琵琶湖を見渡せる大きな岩の上で、早朝のやわらかな日差しを浴びながら瞑想に入った。

瞑想が深まるにつれて菩薩や如来など仏の諸尊があらわれ、やがて限りなく死に近づいてゆく。そして、涅槃に入ろうとした瞬間、自らの人生の根源を見た。ちようど、山で転落した人が一瞬にして自分の人生をさかのぼって思い出すように、自らの生を、母の胎内に宿ったときにさかのぼって見たのだ。それだけでは、母の生を、さらに琵琶湖に暮らす人々の生を、過去にさかのぼってぜんぶ見たのだ。鎮満はついに解脱にいたった。

釈迦と同じ悟りの境地にいたったのだ。時間空間の制約を超えて、生きたし生けるもの生と死を、宇宙を俯瞰したのだ。ところが、鎮満は新たな懊悩にとらわれる。目の前に、苦海に沈む淡海の人々が厳然として存在している。戒律を守れない人間の生は生きるに値しないのか。愛欲を離れられない人間の生は生きるに値しないのか。そういう人々に救いの手を差し伸べる利他行は、釈迦の教えに反することなのだろうか。

鎮満は、避けることのできない選択に迫られた。逡巡は許されない。このまま山の中に籠もり、ひとり悟りの境地にあそぶか……、それとも山を下りて、菩薩行としての利他行の道に入るか……。

突然、西から一陣の風が鎮満上人の全身を揺さぶった。あたりの木々がにわかになぞめき、山全体がうごめきはじめた。

そして堂満岳が激昂した熊のように咆哮した。そのとき、鎮満は両眼をかつと見開き、決意する、「山を下りよう」と。

その日のうちに鎮満は堂満岳の草堂をあとにし、琵琶湖畔の波打ち際に立った。琵琶湖の水で身を清め、長く汚れた髪と髭を剃り終えたとき、すでに陽は比良の向こうに沈みかけていた。湖面が朱色に反射するきらめきの中で、上人は何年かぶりに耳にする潮騒に浸りながら、墨染に腕とおした。天狗から聖となった瞬間であった。

修行すること十二年、比良の靈氣を一身に蓄えて山を下りた上人は、現在の雄琴の地、派手な電飾看板を掲げ、奇っ怪、面妖な建物が林立しているあたりの湖畔に庵を結んだ。その後、鎮満上人は、春をひさんで生をつなぐ貧しい遊女たち、不殺生の戒を犯さずには生きられない漁獵の民、そういう地をほうのように沈吟する人たちの苦悩を癒すことに、半生を捧げたという。

上人は、淡海の人々から菩薩とあがめられるようになりながらも、名利にとらわれることなく、ただひたすら、釈迦の救いの掌から漏れた人々に救いの手を差し伸べた。そして自らは釈迦の教えをかたく守り、一生不犯の身を貫きとおして、彼の地でひとり静かに九十年の生涯を閉じたと言語継がれている。

あの、女人を斥け愛欲を自らの身に禁じた上人が晩年過ごした地に、かぎりなく男の情欲をあおり、その欲望を充二分に満たせてやろうという一大歓楽街が

出現するとは、何と皮肉なことであろうか。

いや、鎮満上人は地藏菩薩となつて、いまも永遠の利他行を続けているのかも知れない。ひよつとして彼の地にとどまり、そこに働く女性たちを深い慈悲の心で温かく包み、守り地藏として彼女たちを護っているのかもしれない。

いままさに、この比良山系が誇る雄峰、鎮満上人が苦行した霊峰、堂満岳に登頂するときがきたのだ。このチャンスに逃すことは山屋の本能が許さない。三人は運命の糸に導かれるように、鎮満上人の呪力に引き寄せられるように、堂満のピークを目ざして登っていくのであった。

ところどころ雪庇が張り出した稜線を進む。心もち明るくなり、西を見上げると、わずかに雲が切れ、合間から青空がのぞいている。このまま晴れてくれれば、琵琶湖を見渡す絶景が得られるのだが……、そんな期待を裏切るように、ふたたび白一色につつまれる。西から冷たい風が吹きつけてきた。ガスで霞むあれがピークだろうか。心もち足早になる。いや、違ふ、あせるな、しかしピークは近い。

M蔵が、木々の合間に見え隠れする五十メートルほど先の白い頂を指さし、「あれがピークやるか」と振り向きざまに山猿に問いかける。M蔵のさすピークを確認して、山猿は唇を真一文字に結んでうなずいた。

次の瞬間、腹の底に響く鈍い音とともに、Y太が視界から消えた。

くなが村の広場に置かれたラジオのまわりに集まって来ました。父も杖をついてやってきて、みんなによく聞こえるようにラジオのポリウー
ムをあげました。雲一つない快晴で
す。

そして正午、玉音放送が流れはじめます。みな緊張の面もちで拝聴しました。陛下独特のお声が戦争の終結を告げられたのです。このとき国民ははじめて、日本が戦争に敗れ、降伏したことを知ったのです。

勝つと信じていた私は、身体が芯が抜けていくようで、悲しいのでもなく、口惜しいのでもないのに、眼からぼろぼろと涙が落ちてくるのです。万感胸に満つというのです。うか。日本は負けたのです。負けたことのない日本が負けたのです。負けるはずがないと信じ、あれほど苦しい生活にも耐えてきたのに……、でも、負けたという現実を受け入れなくてははいけない。涙を出すだけ出して、また新たな気持で立ち上がりなければ、そして歩んでかなければ、と思いました。

八月末に占領軍の最高司令官であるマッカーサーが日本に降り立ちます。私は、敵国であったアメリカの軍人マッカーサーに、いたわりのある穏やかな印象をもちました。

俳句

蓑女

- 寒暖に下着一枚悩む春
- 竹の子が育つてやれやれ竹の秋
- 鯉のように若さと清さ商店街

晶

- 初夏の湖雲間を破る陽の扇
- 早苗田に笑う山あり志賀の里
- 五月晴幾重の波紋煌めきり

短歌

泰子

- 手にしたる 茶碗ゆくり テーブルに
箸もどかしき 夫と春雨
- 楽しみ時間を 持てきたに
夫は曖昧 笑ひは何処へ

携帯エッセイ▼6

「無償の愛」

母が死んだ。
半年になる。
遠い昔のことの様に思う。
母は、死ぬまで私を愛してくれた。
打算抜きに、理屈抜きに。
そういう愛は他にはない。
無償の愛。
それを無くしてみても、やっと大人になった様な気がする。(龍)

一八〇〜二五〇文字位で

貴方の心のつぶやきをお送り下さい

お茶の友、お酒の友、 ご進物に好適品

今回は神農尊のご活躍のことをお伝えしました。今回はお茶の有効成分が学者諸先生によって急速に解明されてまいりました。無病息災と長寿に大いに役立っているお話です。

10年程前に静岡県川根地区のお茶農家の方々がガンにかかる率が著しく低いとの調査結果が公表され（世界的に）ました。又数年前にはO-157の毒性に抗菌の働きがあると報ぜられました。

昔からお茶は「薬」と申し伝えられる事が立証されたのです。只今殆んどの方が無意識にドリンクしておりますが、少し注意して、ああ美味しい、ああおいしいと思うだけで有益であります。

中国雲南省の少数民族の方々は漬物として食し、中央部の天山北路、天山南路では野菜不足を補うスープとして必需品であります。

我が国では抹茶としてかなり昔から飲食しておりました。近時はアイスクリームなどに多用され摂取が進んでおります。

NPO法人日本茶アドバイザー。ア1-0186号

奥谷 晶男

静岡県産の新茶が到来しました

100g真空包装 1,000円 1,500円 2,000円

好評です